

『西鶴諸国はなし』 咄の創作

——「見せぬ所は女大工」の構想をめぐって——

宮 澤 照 恵

目 次

- 一 はじめに
- 二 典拠論をめぐって
- (イ) 『古今著聞集』の説話
- (ロ) 『醍醐随筆』と口承類話
- 三 何故ヤモリなのか
- (イ) ヤモリの象徴するもの
- (ロ) ヤモリとイモリ
- (ハ) 表記と作為
- (ニ) 守宮と怪異との結び付き
- 四 何故御所方が舞台なのか
- 五 見頭わしを担う女大工
- (イ) 女大工は実在したか
- (ロ) 英雄説話の利用とそこからの飛躍

- (ハ) 二極対立構造
- (三) 「戻り橋」に住む女
- 六 おわりに

一 はじめに

本稿は、『西鶴諸国はなし』巻一の二「見せぬところは女大工」を取り上げ、西鶴のたくらみという視点からその創作方法を明らかにしようとするものである。

本話については、先に奥様に妖物が襲いかかる怪異の場面を取り上げ、妖物の姿形に見られる怪異離れを出発点として、新たな読みを提示したことがある(『西鶴挑発するテキスト』所収「西鶴この一行」⁽¹⁾、以下では「前稿」とする)。同じ題材を取り上げることになるが、本稿

キーワード…西鶴の作為、守宮、女大工、閨怨

はこれまでの諸説を検討しながら「守宮」・「御所方」・「女大工」といったキーワードの持つ意味を検証し、西鶴の手法を探究しようとするもので、前稿を敷衍して述べる面を持つ。資料以外の箇所では一部重複するところもあるが、了とされたい。

「見せぬところは女大工の全文は次のとおりである。但し表記を一部改め、便宜上全体をA～Fの六つに分けた。

A 道具箱には、錐・鉋・すみ壺・さしかね、顔も三寸の見直し、中びくなる女房、手あしたくまじき大工の上手にて、世を渡り、一条小反橋に住けると也。都は広く、男の細工人もあるに、何とて女を雇けるぞ。されば御所方の奥つぼね、忍び返し的那こね、または窓の竹うちかへるなど、すこしの事に男は吟味もむつかしく、是に仰せ付けられけると也。

B 折ふしは秋もすゑの、女郎達案内して、彼大工を紅葉の庭にめされて、御寝間の袋棚、ゑびす大黒殿迄、急ひで打はなせと申わたせば、いまだ新しき御座敷をこぼち申御事はと尋ね奉れば、
C 不思議を立るも断也。すぎにし名月の夜、更行迄奥にも御機嫌よくおはしまし、御うたたねの枕ちかく、右丸・左丸といふ二人の腰本ともに、琴のつれ引、此おもしろさ、座中眠を覚してあたりを見れば、

D 天井より四つ手の女、顔は乙御前の黒きがごとし。腰うすびらたく、腹這にして奥様のあたりへ寄と見へしが、かなしき御声を

あげさせられ、守刀を持ってまいれと仰けるに、おそばに有し蔵之助とりに立間に、其面影消て御夢物語のおそろし。我うしろ骨とおもふ所に大釘をうち込とおぼしめすより、魂きゆるがごとくならせられしが、されども御身には何の子細もなく、畳には血を流して有しを

E 祇園に安倍の左近といふ、うらなひめして見せ給ふに、此家内に、わざなすしるしの有べしと申によつて、残らず改むる也。用捨なくそこらもうちはづせと、三方の壁斗になして、なを明障子迄はづしても何の事もなし。

F 心に掛る物は是ならではと、ゑいざんより御きねんの札板おろせば、しばしうごくを見て、いづれもおどろき、壱枚づつはなしで見るに、上より七枚下に、長九寸ばかりの屋守、胴骨を金釘にとぢられ、紙程薄なりても活てはたらきしを、其ま煙になして、其後は何のがめもなし。

この咄で西鶴は、一般の人の知ることのない御所方の奥向きに場を設定して守宮の怪を描き、「女大工」という珍しい職業を取り合わせて、その女大工に見頭わしの役を担わせている。全体の枠組みとしては、伝統的な「英雄による化け物退治」をなぞっていることが了解されよう。

以下では、右の構想が担う意味を探りながら、改めて一編を読み解き、本話に込められた「西鶴のたくらみ」に迫りたいと思う。

二 典拠論をめぐって

本話は、『諸国はなし』一書の中でも比較的取り上げられることの多い咄である。典拠に関する論考が多い中で、「生き物が金釘に閉じられても生きていた」という興味の中心をなす奇談については、早くに類話が指摘され、それらを本話の原拠と見做す説が定着しているように見受けられる。一つは、後藤興善氏が『古今著聞集』と西鶴説話(『西鶴研究』⁽²⁾)において指摘された、『古今著聞集』の「渡辺の薬師堂にて大蛇釘付られて六十余年生きたる事」という話であり、もう一つは宗政五十緒氏がこれに付け加える形で提示された、『醍醐随筆』の「百足が護摩札の下に釘で打ち付けられながら二十余年生きていた」という記事である。始めに、この二つの典拠論を検討しておきたい。

(イ) 『古今著聞集』の説話

まず、『古今著聞集』の説話を原拠とする後藤説を取り上げる。これは、『古今著聞集』巻二十に連続して置かれた二つの話(夢中の怪を描いた「摂津国ふきやの下女昼寝せしに大蛇落懸かる事」、及び当該の生き物の奇談「渡辺の薬師堂にて大蛇釘付られて六十余年生きたる事」)が、そのまま本話の中心話材と重なることに注目し、西鶴がこの二話を基にして「見せぬ所は女大工」を創作した、とするものである。本話の骨組みが十全に説明できるため疑念を挟む余地がなく、以降、諸注釈に踏襲されることとなった。⁽⁴⁾ また本話の作品論・典拠論も、同説を土台として展開してきた側面があると言えよう。⁽⁵⁾

しかし筆者は、「近年、諸国はなし」と銘打って新しい諸国はなしを書こうとしていた西鶴が、咄の創作にあたって、先行説話集の連続して置かれた二編をこままであからさまに利用するだろうか、という素朴な疑問を拭いきれない。意外なものを結びつける着想のエネルギーといったものが、西鶴の咄作りの原動力と考えるからである。この疑問はさておくとしても、後藤説には書承年時の問題が残る。『古今著聞集』の刊行年次が元禄三年まで下るからである(近世初期の写本も何点か報告されているが、西鶴本人或いは近辺の誰かが『著聞集』の写本を所持していた確証は薄い)。

その後、佐竹昭弘氏によって『宇治拾遺物語』と『古今著聞集』の両書から一四六話を抜粋した『昔物語語治聞集』(貞享元年刊)が紹介された。⁽⁶⁾ 本話の原拠と見做された上記の二編は、巻一の十五に「くちなは針におそれし事」として、巻二の十に「薬師堂のくちなはの事」として、それぞれ収められている。藤江峰夫氏は、この書と本話との関係に言及され、本話の原拠を上記『古今著聞集』の二話と見做した上で、直接の摂取は『昔物語語治聞集』によると考える方が無理がないとされた。⁽⁷⁾

藤江氏の補説によって、『古今著聞集』原拠説は確定したかに見える。だが、果たして書承年時の問題は氷解したと言えるのであろうか。以下に問題点を挙げ、再検討しておきたい。

管見の範囲では、『昔物語語治聞集』は「貞享元年十一月十六日 川島平兵衛 八尾清兵衛 開版」の刊記を持つものが早い⁽⁸⁾(国会図書館蔵本・伊達文庫蔵本)。一般に、刊記に記載された年時と実際の発売日と

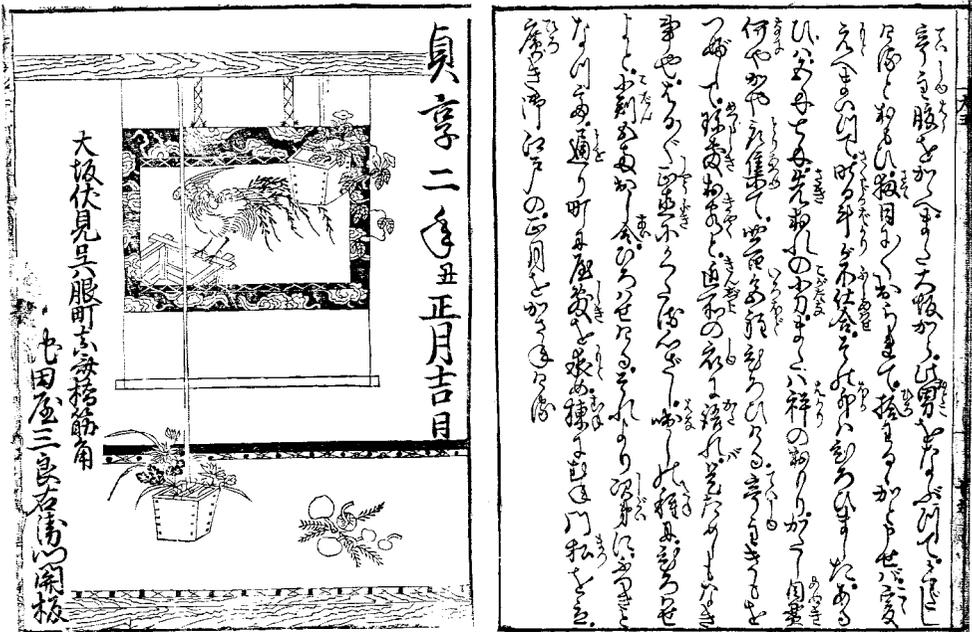


図1 『西鶴選集』(おうふう)より転載

(四)

の関係は詳らかではない。だが、八尾のように実績のある版元が日付まで明示している場合、両者が大きく隔たることはないと推測する。

一方『西鶴諸国はなし』の刊記は、「貞享二年正月吉日」とある。「正月吉日」の範囲を推定することは可能であろうか。

本書巻五最終章「銀がおとして有」は、「棟にむね門松を立、広き御江戸の、正月をかさねける」という文言で閉じられる。浮世草子が祝言で終わることは常套とは言え、この文言には正月刊行を視野に入れた西鶴の意識が窺えるように思われる。刊記の背景には、図1に示すように床の間飾りが描かれる。というより、床の間飾りを中心にして両脇に刊年と版元が配されている。

最終章「銀が落ちてある」の挿絵を兼ねているため、よく見れば橙や若松ならぬ紅葎や秋の草花になっているとは言え、本書に新春の気分を添えていることは間違いない。刊記に絵を配すること自体珍しく、この形は意図的なものであると見ることがができる。そうであれば、日付の正月「吉日」は新年を迎えた直後である方が、頌春を演出する巻末の効果は大きくなる筈である。

本書の実際の刊行時期を推定するもう一つの手掛かりは、同時期に西村から出された『宗祇諸国物語』(貞享二年正月上旬日刊)の存在である。この書は貞享二年正月刊の『改正広益書籍目録』に四冊本として掲出されており(実際には五冊本として刊行)、そこには一種の出版予告の意味合いが認められる。『宗祇諸国物語』の刊行予定は、あらかじめ一部には知られていたと考えてよからう。競合関係にある本書の刊行にあたっては、西村に出遅れぬよう配慮が働いたことと思われる。

周知のように、「正月吉日」刊行の書物と初商いとが明らかに結びつくのは八文字屋本からである。だが本書の場合も、上述した巻末表現や刊記の挿絵、西村との競合などから、年が改まって間もない時期の刊行が予定されていたと推断することが可能なのではなからうか。推測を重ねることになるが、場合によっては「歳旦帳」の例に見るように、前年の内の発売が予定されていた可能性もあろう。

一般に入稿から製本・発売までの一連の作業に要する時間は、二カ月から三カ月と考えられる¹⁰⁾。草稿執筆期間を含めれば、準備に要する期間が更に延びるの言うまでもない。本書の場合、版元の池田屋が新興の本屋であったこと、池田屋を取り巻く大坂の出版業界もまた始発期と呼ぶべき段階であったことなどを考慮すれば、作業期間を大幅に短縮できたとは考えにくい。

以上を勘案すると、正月前後に刊行を予定されていたであろう本書の執筆にあたって、前年十一月十五日の刊記を持つ『治聞集』に見える記事を参照し得た可能性は、『古今著聞集』の本文を実見し得た可能性同様、低いと言わざるを得ない。

(口) 『醍醐随筆』と口承類話

次に宗政五十緒氏によって付け加えられた典拠である、寛文十年刊『醍醐随筆』の記事内容を目を向けよう。当該記事は、「百足が護摩札の下に釘で打ち付けられながら二十余年生きていた」というもので、三柳が「直接上林峯順に聞いた話」である。本文の一部を引く。

蜈蚣の一尺ばかりなる身の正中を釘にて打つけて有。……いかに
もすこやかにて、頭をあげ手足をうごかす。廿余年死せずしてか
く生長するにや。
〔続日本随筆大成10〕

周知のように峯順は、『西鶴名残の友』にも名前が見える宇治在住の西鶴の俳友である。西鶴は書物を介さず、峯順から直接話を聞いていたとも考えられる。書承・口承いずれの経緯を取ったにせよ、この話は西鶴のもとに届いていた可能性が非常に高い。時代は下るが、同種の話が『煙霞綺談』に見えることを堤精二氏が紹介しておられる¹¹⁾。類似の話は、三柳の身辺に限らず巷間に流布していたのではないかと推測する(時代は全く異なるが、筆者は沖縄での報告例やシベリアでの類話を目にしたことがある¹²⁾。いつの世にも有り得る奇談という印象が強い)。

入手経路が何であれ、「生き物が金釘に閉じられても生きていた」という奇談をキャッチした西鶴は、目録小見出しに明記するとおり「不思議」咄の一編に仕立て上げた、として誤るまい。しかし、当該の類話を見るかぎり「金釘に閉じられても生きていた」奇談の主体は様々で、守宮に限るものではない。因みに入手経路として最も可能性の高い上林峯順(または『醍醐随筆』)による話では、主体は「蚣」であった。では何故西鶴は、「蛇や百足、蜥蜴など」様々に伝わる事例を「守宮」に特定したのか。この問いは、当該話における西鶴のたくらみを

探る上で重要な手掛かりとなろう。

三 何故ヤモリなのか

(イ) ヤモリの象徴するもの

周知のように、守宮は雌雄の情愛が深いとされる。『和漢三才図会』卷四十五には「守宮不多淫」とある。¹⁴ 古代中国以来長い伝統を持つ「守宮を用いた呪法（女の浮気封じのまじない）」も、和歌・俳書を初め本草書や仮名草子等々に散見し、我が国に定着してきたことが知られる。関連する記事や用例は枚挙に暇がない。まずは漢詩の例を挙げておこう。

西湖竹枝歌¹⁵

其九

望郎一朝又一朝

信郎信似浙江潮

床脚搗龜有時爛

臂上守宮無日銷

〔鉄崖古楽府〕

西鶴自身はこの題材をどのように取り上げているだろうか。付合には、

(六)

心覚えいもりのしるしあらためて

ひさしき留守の内方の顔

大事じゃぞ思ひにもゆる火のまわり

〔独吟一日千句〕第二¹⁶

の例がある。

『好色五人女』巻二の一「恋に泣輪の井戸替」では、こさんから「此むし（井守）竹の筒に籠めて煙となし恋ふる人の黒髪にふりかくればあなたより思ひ付く事ぞ」と聞かされた樽屋は、おせんを思うあまり他のことが耳に入らず、ただただ「井守を焼きて恋のたよりになる事を深く問ふ」ことになる。

『本朝桜陰比事』巻四の三「見て気遣は夢の契」では、「殊更此男りんき深く旅立折ふしは女のしらざるやうに、宮守^{いもり}の血をとってひだりの肘に付け置ぬ。是を虫しるしとて其の女男にまみへぬうちは何程洗ふても落ちざるためし有」と、まさに守宮の呪いを巡る不倫の有無が、裁きのテーマとなっている。

(ロ) ヤモリとイモリ

上述のように、西鶴は「恋の象徴」・「呪い」の双方の伝承を小説に効果的に生かしている。注意すべきは、何れの意味合いでも、本来「ヤモリ」とあるべきところが「イモリ」となっており、ヤモリの用例は本話以外に見当たらないことである。また『色道大鏡』巻六「心中部」の入墨の項に見える「呪い」の説明には、『無名抄』・『袖中抄』・『歌林

良材集』などによる考証を置くが、こちらにも「ゐもり」・「守宮(イモリ)」と表記されている。¹⁷⁾

西鶴及び同時代の人々は、ヤモリとイモリとを取り違えていたのだろうか。回り道になるが、当代におけるイモリとヤモリの表記及び用例を一瞥しておく。『類船集』¹⁸⁾の表記では、

いもり——印

いもりの印——消す

血——守宮^{ヤモリ}

が付合に挙がつており、イモリとヤモリが区別されていない様子が見て取れる。『節用集』の類いかどうか。区別の有無という観点から、見出し表記の一部を引いて比較しておく。

合類節用集 一六八〇年——守宮イモリ、蠅蜒ヤモリ・イモリ

新刊節用集大全一六八〇年——守宮イモリ、守宮ヤモリ

書言字考節用集一七一七年——壁虎・守宮イモリ、壁虎ヤモリ

とある。¹⁹⁾益軒の『大和本草』(一七〇八年)では、「守宮」にイモリ・ヤモリの訓を当て、「国俗ニヤモリト云カベニヲル蟲也」と説明。²⁰⁾『和漢三才図会』(一七二三年)には「守宮^{ヤモリ}」と見える(前掲注14書)。

以上の如く、当代における両者の混用は明白である。

一方、歌語では「ゐもりのしるし」が熟した表現である。これにつ

いては、加藤直子氏が『「ゐもりのしるし」について』(『会誌』10号)において、『俊頼髓脳』を中心に考証しておられる。中国・日本ともにイモリ・ヤモリ・トカゲは厳密に区別されてこなかったことを踏まえ、本来ヤモリの血を用いた呪いの「赤」のイメージが「イモリの腹の色」と結びつくことで、「ゐもりのしるし」が歌語として広まったと推定されている。委細は同論文に譲るとして、ここでは本来ヤモリであったものが歌語「ゐもりのしるし」の定着を通してイモリとなるが、当代においては両者の区別がほとんど無いことを指摘するに留めておく。

(八) 表記と作為

話を、西鶴がヤモリに特定した理由に戻そう。三(イ)で、守宮が男女の情愛を象徴する生き物であり、特に女の貞操と結び付くイメージが強いことを示した。西鶴が怪異の正体を「蛇や百足、蜥蜴」などではなく「ヤモリ(屋守)」とした選択の裏には、単なる奇談の受け売りの紹介ではなく、「男女の情愛や女の貞操」更には「空閨の恨み」と結び付けた咄を創ろうという、明確な企みがあったものと読むことができる。

次に、西鶴が好んで用いる「イモリ」ではなく「ヤモリ」を選択し、かつヤモリにさほど一般的ではない「屋守」の表記を当てていることに触れておく。

当代の一般的な表記は「守宮」である。益軒の『大和本草』(前掲注20書)では「守宮の呪い」を挙げ、「故ニ宮中ヲ守ルト云意ヲ以守宮ト名ヅク」とする。『色道大鏡』も「宮を守る」表記の理由を、「宮には

女のゐる所なれば、女を守護する心になづけたり」と説明している(前掲注17書)。同種の指摘は多い。即ち当代においては、「守宮」という表記は宮を守る意味と結びつき、伝承と相俟って空閨の恨みを直截に連想させるものであったことが知られるのである。

一方、上述の『好色五人女』では井戸替の場面にあわせて「井守」(井戸を守る)と表し、『本朝桜陰比事』では「宮守」(宮を守る)と表している。何れも西鶴が表記に意を用いている例証となろう。筆者は本書の版下が自筆によるものとする立場であるが、本話においても意図的に「屋守」の表記が選ばれているものと考ええる。

即ち本話でことさら「屋守」の表記を用いているのは、「屋を守るはずの屋守が原因となつて、結果的に屋内を壊させることになつた」と、言葉遊びの趣向を取つてみせていることによると考えてよからう。この裏には、「奇談の主を守宮に特定することで空閨の怨に繋げる」という着想と、上述の文字のイメージとの付きすぎを嫌い、作為を包み隠し、さらには諧謔味を加えるねらいがあつたものと思われる。読者に謎解きを委ねる姿勢といつてもよからう。表記一つにも、俳諧の手法に通じる精神が看取されるのである。

(二) 守宮と怪異との結び付き

次に、上述の守宮が怪異と結び付く筋道(西鶴の着想への経路)を確認しておきたい。

本話では怪異色を強調すべく、怪異譚の典型とも言える「夢中の怪異」が取り込まれている。多くは、変化のものが現れて女子供に害

をなすというもので、その正体は家霊・器物・爬虫類などである。例示には事欠かない。話型の一つと捉えてよいものである(西鶴作品で言えば、その利用例として『好色一代男』巻四「夢の太刀風」や、『世間胸算用』巻三「小判は寝姿の夢」の一場面が直ちに想起されよう)。とは言え、この種の夢の怪異の中に守宮と繋がるものを見ない(むしろ守宮には、上述の『色道大鏡』の例のように「守る」イメージが付着している)。一方、二一(口)で本話の創作契機と結論付けた「生き物が金釘に閉じられても生きていた」という奇談であるが、この種類の話に怪異と結び付くものは見当たらない。では、守宮が怪異と結び付く筋道(西鶴の着想への経路)はどこにあつたのか。

この点について、本話の素材として既に指摘されたことがある(『伽婢子』巻十「守宮の妖」に注目したい。但し「守宮の妖」が純然たる怪異咄に仕立てられており、守宮が多数集まつて災いをなすのに比して、本話では危機感は薄く守宮も単独で登場するに過ぎない。本話に用いられている「夢中の怪異」という話型は、「守宮の妖」には見られない。両者の間には、隔たりも大きいのである。詳述する暇は無いが、「守宮の妖(又はその原話)」は、「守宮」と「怪異性」とを結び付ける筋道を提供した媒材に過ぎず、内容を左右するところまでは関わっていないと考えて誤るまい。

西鶴の手にかかると、怪異と結び付いても、守宮にはやはりどこか閨の秘め事の気配が濃厚であることを重ねて指摘しておきたい。

四 何故御所方が舞台なのか

ヤモリに込められた西鶴の意図が判明すれば、舞台を御所方とした理由も自ずから明らかであろう。「閨怨」の舞台として最も効果的なのは、武家方ならば大奥もしくは大名の奥向きであり、堂上方ならば後宮(御所方)ということになる。世間一般との隔絶の度合いがより高いのが後者なの言うまでもあるまい。御所方は、筋目正しい色白の美男美女が琴瑟香書歌に明かし暮らす雅な世界である。全てが華奢で、使用言語からして世間一般とは異なる高貴な空間である。西鶴は道具立てを揃えて、宮方の世界を具現化する。本話で内裏とそのゆかりをイメージさせるものを挙げれば、次のとおりである。

密室空間——御所方 奥局 忍び返し 窓の竹 御寝間 袋だな
明障子 叡山の札

奥様とその周囲——奥 御うたたね(「転寝の枕—琴」は付合)
女郎・腰本(女官。雑仕・典侍・内侍等の俗化) 琴の
つれ引き(「琴—宮所」は付合) 守り刀 御身 右丸
左丸・蔵之助(女官の源氏名)

占 い——安倍の左近(晴明のゆかり) 小反橋(戻り橋。晴明の
ゆかり)

その他——叡山(宮中の守護) 小反橋(綱説話)

わずか一丁半という分量を考慮すれば、西鶴が御所方の雅な世界と

そのゆかりを選び出すことに意を用いて、実在感を確保していることが了解される。

本文Cに即して見ておこう。

「すぎにし名月の夜、更行迄奥にも御機嫌よくおはしまし、御うたたねの枕ちかく、右丸・左丸といふ二人の腰本ともに、琴のつれ引、此おもしろさ」、その夜更けに怪異が起ころ。奥様の夢物語によれば、異形の物が「我うしる骨とおもふ所に大釘をうち込とおぼしめすより、魂きゆるがごとくならせられし」とある。守宮が釘に打ち付けられたそのままを、西鶴は閨の秘め事にとりなしているのである。

本文D・E中の「わざなす」しるし」や「血」が貞操と結びつく言葉(守宮の付合)であったように、本文Cの夜更けの描写も注意深く読めば、まさに「空閨の恨」と重なっていることに気づく。「名月」は「独り寝」と付合であり、また深宮の涙と結びついて詩に詠まれてきた。その「名月の夜」にもかかわらず、男性が全く姿を現さないことに注目すべきであろう。更に「琴」も「人待ねや」と付合である。

地下から見れば、宮中の暮らしは生活の苦勞のない隔絶した世界に思える。西鶴は、高貴なあたりであればなおさら、下々の知らない心労があるのだとおぼめかす。「閨の淋しさ」・「閨怨」は、直截には表現されない。名月の夜、独り寝の床に「守宮」という情愛の象徴を呼び込むことによって、あくまで典雅に彩られて表現されているのである。一方で、お座敷に「戎大黒」を取り込む(本文B)趣向や女官の呼称などに俗化精神を見せていることを付記しておこう。

五 見頭わしを担う女大工

本話の怪異は最後に見頭わされ、打ち破られる。その役目を担うのは女大工である。藤江氏は前掲注5論文において、『昔物語治聞集』巻二の十「葉師堂のくちなはの事」の挿絵に大工が描かれていることに注目され、西鶴が女大工を思いついた契機はこの挿絵によるものだと推定されている。

本話の中核をなす奇談が「釘に閉じられても生き続けた生物」であることは間違いない以上、その奇談に「大工」を結びつけた着想の筋道を探ることは重要であろう。しかし実際の事例につけば、ほとんどの場合発見のきっかけは修理・改築工事であった筈である(上述の『古今著聞集』・『醍醐随筆』・『煙霞綺談』、何れの例も然りである)。従って、そこに大工が登場するのは自然であろう。『昔物語治聞集』の刊行と本話執筆との先後が明らかにならなければ議論は進まないが、筆者は「釘に閉じられても生き続けた生物」という奇談の発見と大工との繋がりに、特別な筋道を用意するには及ばないと考え。本話の場合、「家屋に害をなすものがある」と言われれば大工がしつらえを外して点検するのは自然な成り行きであろう。西鶴のたくらみを探る上では、何故その大工がことさら「女大工」なのか、という点をこそ問題にすべきであろう。

女大工の設定を巡って、「婦人の大工もある」というところに西鶴は興味を感じている」(近藤忠義 前掲注24書)、「世間は広く世に無いものはない」という世界観を描いた」(藤江峰夫 前掲注5論文)という解釈

がある。しかし、そもそも、宮中に入入りできる女の大工職人があり得たのだろうか。迂遠なようではあるが、この点を確認しておく必要がある。

(イ) 女大工は実在したか

周知のように、寛永期には京都御大工頭中井家による大工組支配が確立⁽⁵⁾して、畿内・近江の大工はその支配体制下におかれる。一方、寛永期を過ぎると修理補修を原型とする小普請方が台頭、作事方との競合時代となる。それに伴い民間への請負発注の例が多くなり、平大工も増加する(『中井家大工支配の研究』⁽⁶⁾第五章参照)。

当該の咄もそうした趨勢を背景に、作られていることは確かであろう。しかし、内裏関連の御用作事となれば幕府直営工事であり、小普請方が請け負うにしても町大工を単独で差し向ける可能性はない。たとえ小破修理であっても、中井家支配下の大工棟梁(または肝煎)が出向くはずである。⁽⁸⁾奥向きに男の大工は不都合という論理が通るならば、大奥の場合はどうか。当代の大奥修理例は記録に事欠かない。『承応日記』に見える次の記事などは、大奥への大工の出入りの実態とともに御用作事の責任体制も垣間見えて興味深い。参考資料に過ぎないが、紹介しておく。

(承応二年九月)十四五日時分、御城奥方破損有之候處、日暮候而御普請仕廻、大工罷出候處、一人天井ニ上リ在之、寝入不罷出、夜中さめ驚騒ぎ候付、之絡捕番人見付、右之大工則牢舎被仰付之、

御普請奉行、御広敷番番頭宇都宮九郎右衛門、同組三人、伊賀同心三人閉門被仰付之
 (『東京市史稿皇城篇式』)

小家の修理を頼まれる素人、大工の中には、或いは女性がいた可能性はあるかもしれない。しかし、大工組棟梁には女性は存在しない(前掲注28論文記載の個人名参照)。まして、女性の大工が監督無しに単独に近い形で御所方に向くことはあり得ない(当時、大工組に素人を雇い入れることは取り締まられていたから、支配下に素人がいることは想定外の範囲である。また大工組支配とは別系統の内裏所属の大工衆は、既に廃止されている)。

本話の注釈書の中には、「女大工がいたかどうか不明。ただし西鶴は、京都にはそうした職業がありうる」と考えた(前掲注4書『新日本古典文学体系』脚注)という解釈もあるが、西鶴は女の大工は有り得ないことを承知の上で創作したと考えるべきであろう。

確かに西鶴は、「都は広く、男の細工人もあるに、何とて女を雇うぞ。されば御所方の奥つぼね、忍び返しのおこね、または窓の竹うちかへるなど、すこしの事に男は吟味もむつかしく、是に仰せ付けられると也。」と本文Aでその整合性を謳い、特殊な職業の実在性を読者に納得させる書き方をしている。しかしこれは虚構の中に仕組まれた論理であって、ストーリー展開上読者をウソ咄に引き込むための西鶴の仕掛けの一つと捉えねばなるまい。

話を戻そう。女大工という職業が西鶴の虚構であるならば、改めて大工が女である必然性を作品構想の上から考え直す必要がある。

(ロ) 英雄説話の利用とそこからの飛躍

先に述べたように、本話の構図は「英雄による化け物退治の話型」を大枠で利用しつつ、そこに閨怨が絡む怪異を取り合わせた、と捉えることができる。これまでの説話や物語の世界では、最高権力者や高僧、何らかの超能力を持つ者、知恵に秀でる者などがこの英雄の役割を果たしてきた。しかし本話の場合、単純に英雄を登場させて化け物を退治し大団円となる、という訳にはいかない。何故ならここで起きた怪異は、中世説話に見るような「家霊や鬼・異類が人を殺める、攫う」という類とは異質なものである(現に本文Dには、「御身には何の子細もなく、豊には血を流して有し」とあり、実害のなかったことを示唆している)。

上述したように、本話の怪異の裏には、「空閨の恨」・「深宮の涙」が隠されている。それは、ただ一人の男をひたすら待つことで生ずる「怨み」であって、外から男が入り込んできては意味を成さなくなる。それを裏付けるように、怪異の起きた瞬間を含め後宮のそのあたりに男の気配は皆無であり(本文C)、登場人物も全て女に限定されている。守宮(＝妖物)までも雌にしている点に注意を向けるべきであろう。一話そのものが「女だけの世界」から成り立っているのである。

後宮に出入りできる男は天皇以外にはいない。その天皇自身が「奥様」に独り寝の憂き目をみさせ、怪しいものの襲来を許すことに繋がっていく——つまり、この話は後宮という特殊な舞台を設定したことで(ヤモリを媒介に後宮の閨怨モチーフを選択したこと)、枠組みとしては伝統的英雄説話の型を借りながらも、外部の男の介入を拒むと

いう矛盾を抱え込むことになった。即ち、構造自体が「英雄による鬼（異類）退治」という説話の論理を拒んでしまうことになったのである（筆者は、当時刊行されていた中世説話は、ほぼ同時代作品として享受されていたと考える立場である。しかし作品構造の違いは明確に指摘できる。『諸国はなし』に見る中世説話との乖離とそこからの飛躍については、話が広がるため稿を改めて論じたいと思う）。

空聞を守る奥様を襲った怪異を退治する、という役割を男に委ねるわけにはいかなければ、話の構造論理は、それに代わる女の英雄を要求することになる。「奇談」と「深宮の涙」とを「怪異」を媒介として結びつけようと着想した時点で、怪異を解決し現実に戻す女の英雄が不可欠となったのである。少なくとも見頭わしの役は女に委ねられる。その条件を整理すれば次のようになる。

- 1、後宮の人々（女御・女官）とは別の世界に生きる女が出自は卑しくないこと、
- 2、後宮の人々にとってライバル意識を持つ必要のない女であること、
- 3、奥向きへの出入りが可能な女であること、

以上の三点のうち、2について言葉を足しておく。ライバル意識を与えない女とは、女でありながら中性的立場を保つことができる人物であり、性を超越している人物ということである。

ここで、女大工の容貌に注目してみよう。本文Aの前半部分にその

(一一)

描写がある。森山氏による説明と併せて読んでおく。

道具箱には、錐・鉋・すみ壺・さしかね、顔も三寸の見直し、中びくなる女房、手あしたくましましき大工の上手にて、世を渡り、一条小反橋に住けると也。

まず大工に関連して錐・鉋・すみ壺・さしかねなどを挙げて、その連想から「顔も三寸の見直し」という諺をひく。もちろん、さしがね（曲尺）の縁で三寸といったのだが、同時にこの女大工の容貌が中低（杓子面）であることにかかってゆく。そして「手足たくましましき」「大工の上手」のこの女が一条小反橋に住んでいるという。いうまでもなく小反橋は土蜘蛛伝説で有名な一条戻り橋を連想させるものであり、かつまた大工と縁のある「戻る」という語をもちいて、この女大工の「中びくなる」容貌までも暗示している（『西鶴の方法』『封建庶民文学の研究』⁽³⁰⁾所収）。

森山氏も触れているように、西鶴は女大工の形象にあたって、「三寸の見直し・中低・戻る」と醜女なることを重複も厭わず強調している（住まいの戻橋については後述）。一つ一つの言葉が周到に選ばれている本書⁽³¹⁾であってみれば、この重複には明確な理由があるはずである。その理由とは、この女が「醜女」であることを強調しなければ、怪異の見頭わしのための三条件のうち、2を満たすことはできないからである。同時に、女大工が人並みの器量であれば、次項（八）

に示す二極構造も成り立たないことになる。

(八) 二極対立構造

「女大工」を虚構したこの意味を、別な観点から考えてみよう。咄の中に仕掛けられた「二極対立構造」に目を向ければ、大工は女、しかも醜女でなければならぬ必然性がより鮮明に見えてくるように思われる。

本話に登場する奥様と女大工とは、全く異なる世界に住んでいる。その違いは、後宮の女と市井の女、美人と醜女というランク上の優劣に留まるものではない。一方は男の視点による「女の品定め」という尺度を疑うことなく生き、もう一方は(当代では異端に属するであろう)男の目を度外視した「自らの生活力」という尺度によって生きる。両者の拠るところは、正反対の価値観である。意識するしないに拘わらず、二人の女はそれぞれの世界の頂点に位置し、二つの世界は交わることがない(女の頂点に位置すると見える奥様も、一旦尺度を入れ替え、女大工が拠り所になっている「自らの生活力」を基準に考えてみれば、実は無力な女に過ぎない。世界を入れ替えれば、二人の女の位置は直ちに逆転する)。こうした正反対の価値基準が併存している構造を称して、私に二極構造としたのである。先に四で指摘した御所方の道具立てへの配慮は、対極にある女大工の世界(読者にとって現実感のある市井の世界)との対比を際立たせ、二層構造を保障するためのものとも受け止められよう。

右の二極構造を念頭においた上で、改めて女大工の姿形を見直して

おこう。独身の労働者で、生活力あふれる「手足たくまじき」醜女は、新しくかつ珍しい女像である。小説に醜女が描かれない訳ではない。西鶴作品に限ってみても、『本朝二十不孝』巻三「当社の案内申す程おかし」や『好色一代女』巻一「舞ぎよくの遊興」などに見える。これらに描かれた当世の醜女達は良縁を望み、世帯を持つてからは嫉妬に苦しむ。これらの醜女達と本話の女大工とは決定的に異なる。女大工の方は縁遠さを意に介さず自活して生きているのである。それも、『好色一代女』に見えるような女の職種からも売色業からも遠い、「女大工」という特殊な設定となっている——つまり、女大工は明らかに後宮の女達の対極を意識した造形なのである。同時に、後宮でおきた怪異を解決し、全てを現実に取り戻すことを可能にする造形だったのである。

西鶴は二極対立構造を補完し女の恨みを明示するべく、登場人物を女に限定し閉じられた空間を用意した。一般的尺度から見れば、最下位に位置する女が、最上位に位置する女の危機を救う。読者は、そこで虚を衝かれることになる。更には筋目・教養・品性・美と全てに完璧な筈の女の空聞までも、市井の醜女(対極に位置する女)によって露にされてしまう。ここに逆転のおもしろさと、権威を無にする現実的批評精神を見て取ることができよう。

(二) 「戻り橋」に住む女

本章の最後に、女大工が一条小反橋に住むという設定について、その意味を考えておこう。女の中低な容貌と重ねた表現であることは、

先に見たとおりである。女大工がその戻り橋に住むことから、土蜘蛛伝説や綱の鬼退治説話を本話の原拠と考え、綱と女大工とを重ねて読む説がある。確かに、一条戻り橋は説話のイメージを喚起する地名である。

土蜘蛛伝説と本話とを比較すると、「主を悩ませる化生のものが登場し、それが退治される」という大筋において通底し、「戻り橋・血・刀」といった共通語彙を見出すことができる。一方、綱の鬼退治説話と比較すれば、鬼退治以外に「印・札・剣・戻り橋・安部晴明」などの道具立てが重なっている。しかし、これらをもって本話の原拠とするのは乱暴であろう。全体の構想をそれによって説明できないからである。

霊剣をもって土蜘蛛を切り伏せる部分を山場とする頼光説話にしても、鬼が老母に化けて腕を取り返しに来る部分を見せ場として持つ綱説話にしても、それをもとに「あらぬものにしなす」創作をしたというのであれば、魍魎魍魎との格闘なり腕の奪還なりが、何らかの形で反映しているはずではなからうか。少なくとも、当時の読者は西鶴の咄に推理可能な作為や改変・謎かけなどを期待し、謎解きや原拠離れの妙を楽しんだと思われるがどうであろうか。

いずれにしてもこの二つの説話からは、女大工を生む必然や御所方を舞台にする必然が見えない。ここはやはり、綱説話から英雄の面影のみを吸い上げ、女大工に付与したに過ぎない、と捉えるのが妥当なのではあるまいか。

「市井に住む風変わりな醜女というだけでは、見頭しの力が足りない。そこで、一条戻り橋を住まいとすることで綱説話のイメージを利

用し、英雄の面影を吸い上げて女に付与する。女大工はより強力な力を背景に持つことで怪異を見頭わし、更には現実引き戻す英雄の働きが可能になった」と考えてはどうか。また上述のように、女大工は二極対立の一方の世界を形成し、雅な世界と対峙している。この構想も又、女大工が説話世界の英雄のイメージを背景に持ち、その面影を付与されたことで始めて可能となったものと思われる。

一条戻り橋は、綱以外に安部晴明ゆかりの地でもある。橋に住む醜女というのであれば、橋姫なども想起されよう。英雄による化け物退治説話は数々ある。特定の一つが本話の原拠になったというのではなく、化け物退治の構造は型として話の枠組みに利用し、説話から吸い上げた様々な超人のイメージを女大工に付加したものと考える。

なお、『古今著聞集』の説話を原拠と考え、そこに登場する地名の「渡邊」から綱へ、「葉師堂」から葉師如来を経て比叡山へと、連想の糸に導かれて咄の道具立てができたという構想説がある(宗政五十緒 前掲注4書及び注3論文)。「著聞集」原拠説が崩れば成立しない危うさはさておき、御所方を舞台に選んだ本話で「綱」を都の剛の者の代表として思い浮かべ、「比叡」を皇室にゆかりのある王城守護の本山として話に取り入れること自体は、自然な発想の範囲と思われる。西鶴の咄を読む際「物付」という方向からのみ筋を通すことに固執すると、却って見失うものもありそうに感じられる。

六 おわりに

本稿では、これまでの典拠論を検討した上で、西鶴が怪異の主体を「守宮」に特定し、見頭わしの役を担わせる「女大工」を虚構した意味を中心に据えて一話を読み解き、仕掛けられた西鶴のたくらみに迫ってみた。本話は、二―(口)で述べた奇談の入手を創作契機としており、奇談の主を「守宮」に特定することで閨怨を呼び寄せ、一方で「守宮」を介して怪異に繋がっていったものと考ええる。女大工の虚構の意味も大きい。単に女大工という珍しい風俗を扱ったがゆえに当世の咄になつたのではなく、女大工を虚構することによって深宮の涙を暴くところまで及んでしまうところに、西鶴の作意と新しさを窺うことができよう。

五―(二)で若干触れたように、個々の道具立ては連想の糸で二重三重に繋がって重奏性をもたらしているが、同時に道具立ての一つ一つにその部品を選んだ作者の必然がある。西鶴は何食わぬ顔で謎を仕掛けていく。それぞれの意味を読み解くと共に、作為に気付くことを、咄自体も要求しているように思う。

最後に、『西鶴諸国はなし』に見られる「咄の新しき、西鶴らしき」という観点から、当該の咄に顕著な特徴を二点指摘しておきたい。一つは、怪異を扱いながらもそこから離脱し、諧謔に向かう傾向があることである。怪異離れを起こしている要因は一、二に限らない。詳述は別な機会に譲るが、妖物の姿形の形容に始まり、誇張・俗化・言葉遊び・軽口の趣向・挿絵などがその働きを担い、俳諧的精神を具

現していることが明らかである。西鶴は、もともと怪異そのものを描く意図は無かつたようである。この問題については、『諸国はなし』に見る怪異性」という一書全体を見渡す視点から、稿を改めて追究する予定である。

二つ目は、五―(口)で簡単に触れたように、「中世説話の解体と当世化」ともいべき咄の手法が見られることである。即ち伝統的説話のパターンを利用しながらも、その拠って立つ論理を侵食して、当世の話に作り変えてしまう点である。本話に即して言えば、「市井の女大工が、後宮で起きた怪異の正体を見頭わす」という虚構を新たに生み出したことで、結果的に「特別な人間の存在を必要としていた英雄説話」を侵食し、当世の咄として再生させることになった、と捉えられるのである。そこには、説話を当世に再生する西鶴の意図的方法を見ることが出来る。「先行作品群の解体と当世化」という言い方をすれば大上段に過ぎるテーマとなろうが、今後個々の作品に即してその様相を明らかにしていきたいと思う。

〔注〕

- (1) 国文学解釈と鑑賞別冊 平成十七年三月 至文堂
- (2) 西鶴学会編 昭和十七年十二月 台湾三省堂。なお同論文指摘の典拠のうち、後述の「夢中の怪」については三―(二)で触れる。これは「咄の一類型」として捉えるべきものであつて、一つの素材を厳選して原拠と見定める、という性格のものではないと考える。従つて第二章の検討対象からは外すことをお断りしておく。

(3) 『西鶴諸国はなし』のあと書き 『西鶴の研究』所収 一九六九年 未来

社

- (4) 『新編日本古典文学全集 西鶴諸国ばなし 本朝二十不孝 男色大鑑』
 (宗政五十緒 松田修 暉峻康隆 一九九六年 小学館)
 『対訳西鶴全集5 西鶴諸国ばなし 懐硯』(麻生磯次 富士昭雄 昭和五十年 明治書院)
- 『新日本古典文学大系 好色二代男 西鶴諸国ばなし 本朝二十不孝』
 (富士昭雄 井上敏幸 佐竹昭宏 一九九一年 岩波書店)
- 『西鶴全作品エッセンス集成』(浮橋康彦 二〇〇二年 和泉書院)
- (5) 江本裕「西鶴諸国はなし——説話的発想について」『近世文芸』昭和三十七年十一月
 宗政五十緒 前掲注3論文
 藤江峰夫「西鶴の咄の種——『西鶴諸国はなし』中の三編をめぐって」
 『玉藻25』平成二年三月
 『民話の思想』一九七三年 平凡社刊
 前掲注5論文
- (6) 大久保順子「説話の再編と受容——『昔物語治聞集』と改題本の諸本」
 (『香椎潟50』平成十六年十二月)に、宮城県図書館伊達文庫蔵本(貞享元年刊)、及び東北大学附属図書館狩野文庫蔵本(元禄十四年刊)の書誌紹介がある。
- (9) 版元の八尾清兵衛は、『元禄太平記』卷六「書林の中で学者たづぬる」に、京都の本屋十哲の一人として挙げて「八尾」の同族と考えられる。
 『改訂増補近世書林板元総覧』(井上隆明 平成十年 青裳堂書店)には、『般若心経註解並金剛経註解』寛文七・延宝三、があがっている。
 日記などの傍証のある例から引き出した数字である。実際には個別の様々な要因が絡むわけで、限られた例と西鶴の浮世草子とを同列に扱うことには問題がある。だが、俳諧興行に基づく俳書の出版や際物の刊行事例、近刊予告広告、草稿完成時の序跋年次などといった資料を併せ考えると、やはり二、三カ月の作業期間が想定されてくる。
- (11) 池田屋の出版活動については、羽生紀子『西鶴と出版メディアの研究』第二章「大坂出版界の具体相——西鶴の周辺」(二〇〇〇年 和泉書院)に調査・考察がある。
- (12) 「近年諸国はなし」の成立過程 『国文学論叢——近世小説 研究と資料』至文堂 昭和三十八年十月
- (13) 『日本百科全書』「やもり」の項(昭和六十三年 小学館)、及び『50歳からの健康術』一三八ページ 田中良治 (一九九三年 北海道新聞社)。
- (14) 寺島良安 昭和四十五年 東京美術
- (15) 『四部備要』集部による。亀策伝を踏まえ、本話との共通性がある。
- (16) 『定本西鶴全集』第十巻。以下、西鶴作品の引用は『定本西鶴全集』による。
- (17) 野間光辰編 昭和三十六年 友山文庫
- (18) 近世文芸叢刊別巻1 昭和四八年
- (19) 『節用集大系』(大空社)による。
- (20) 寛永六歳永田調兵衛版 卷十四17ウによる。
- (21) 平成三年八月 日本女子大学
- (22) 『文明節用集』・『和漢三才図会』には見られるが、さほど一般的ではない。
- (23) 近藤忠義 『日本古典読本』昭和十四年 日本評論社、及び堤精二 前掲注12論文
- (24) 『五朝小説』の諸皇記。
- (25) 幕府が大工田畠高役免除を公認した寛永十二年頃という(『平成15年度特別陳列江戸時代の大工さん』吹田市立博物館 展示図録による)。
- (26) 例を挙げると、小普請方奉行は寛永九年に四名だったのが承応三年には十名となる。延宝五年には、町大工から三人が小普請方棟梁に登用され、技術力の向上と柔軟な体制が知られる。このように小普請方は次第に力を付け、元禄期には小普請方が作事方を凌駕するという(『近世大工の系譜』内藤昌 昭和五十六年九月 ペリかん社)。

- (27) 谷直樹 平成四年 思文閣出版
- (28) 中井家支配下の大工構成については、所属大工の個人名が記される奉加帳からの分析がなされている(前掲『中井家大工支配の研究』第一章参照)。個人大工も含まれるが、彼らは格付けの高い棟梁が多いという。なお小普請方の組織については『日本建築生産に関する研究一九五九』渡邊保忠 二〇〇四年 明現社 第II部第三編第二章「江戸幕府における官営營繕組織」によった。
- (29) 東京市役所編纂 明治四十五年三月 博文館
一九六〇年 三一書房
- (30) 拙稿『西鶴諸国はなし』咄の創作——八畳敷の蓮の葉』(『北星論集36』一九九九年)第四章で触れたことがある。
- (31) 近藤忠義『日本古典読本』(前掲注23書)、及び森山重雄『封建庶民文学の研究』(前掲注30書)は、土蜘蛛伝説の諧戯化説を取る。
- (32) 網説話を当世化した話として、『懷硯』巻二「二王門の綱」が思い浮かぶ。それに比べると、本話には肝心の鬼の腕や取り返しに来る展開などが全く見られない。網説話と鬼の腕との結び付きの強さを考慮すると、網説話に原拠を求める考え方には組しにくい。

[Abstract]

Making the Stories of *Saikaku Shokoku Hanashi* :
Saikaku's Purpose and Method in “*Misenu Tokoro wa Onna Daiku*”

Terue MIYAZAWA

The purpose of this paper is to shed light on Saikaku's tacit social criticism seen in his work “*Misenu Tokoro wa Onna Daiku*,” a story included in *Saikaku Shokoku Hanashi*. Why Saikaku described an unusual scene—the appearance of a *Yamori* (Japanese lizard) and *Onnna Daiku* (woman carpenter) in the Emperor's harem in Kyoto is investigated. It can be concluded that Saikaku tacitly meant to illustrate the misery of the Emperor's wives, who could no longer expect his affection.